

ここに愛がある

ヨハネの手紙第一 4 章 7-12 節

はじめに

今日から「アドベント」（待降節）に入ります。今年は、今日 12 月 2 日から 12 月 24 日までが「アドベント」になります。

「アドベント」というのは、「待降節」とも呼ばれますけれども、その意味は「到来」という意味で、イエス様が来られるのを待ち望む期間です。

私たちはこの期間、二つの意味でイエス様の「到来」を待ち望みます。一つは、イエス様の降誕を記念するクリスマスが来るのを待ち望みます。そしてもう一つは、イエス様が世の終わりに再び来られる再臨が来るのを待ち望むのです。どちらかという、この「アドベント」は、クリスマスを待ち望むことの方が強調されます。しかし私たちはこの期間、イエス様が再び来られる再臨を待ち望むことも忘れてはならないのです。だからこそ今日の讃美で、「キリストの花嫁」を歌ったのです。

私たちはアドベントの期間に、賑やかなクリスマスパーティーを待ち望むのもよいでしょう。しかし私たちは同時に、イエス様が再び来られる時にもたれる「子羊の婚宴」を待ち望むことも忘れないようにしたいと思うのです。イエス様が再び来られる時、私たちクリスチャンは、キリストの花嫁として迎え入れられ、「子羊の婚宴」で祝福されるのです。

私たちはこのアドベントの期間、クリスマスと同時にイエス様の再臨を待ち望みたいと思います。

1. 互いに愛し合う

今日の聖書箇所はまず、「**愛する者たち。私たちは互いに愛し合いましょう**」という言葉から始まります。ここに出てくる「愛する者たち」というのは、厳密に言えば、「愛されている者たち」という意味の言葉です。ですからヨハネはここで、「あなたがたは愛されている者たちなのだから、互いに愛し合いましょう」と言っているのです。

ヨハネはこの 4 章までの間に、すでに「互いに愛し合う」べきことを、この手紙の中で語ってきました。3 章 11 節には、「**互いに愛し合うべきであること、それが、あなたがたが初めから聞いている使信です**」とありますし、3 章 23 節には、「**私たちが御子イエス・キリストの名を信じ、キリストが命じられたとおりに互いに愛し合うこと、それが神の命令です**」とあります。

今日の聖書箇所でも「互いに愛し合う」という言葉が出てきます。11 節には「**愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた、互いに愛し合うべきです**」とありますし、12 節にも「**私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにとどまり、神の愛が**

私たちのうちに全うされるのです」。

ここで少し注目してみたいことは、7 節でヨハネは、「私たちは互いに愛し合ひましょう」と言っていますけれども、11 節では「私たちもまた互いに愛し合うべきです」と言っています。7 節では「愛し合ひましょう」と呼び掛けのような言い方であったのに、11 節では「愛し合うべきです」とかなり強い言い方になっています。この「愛し合うべきです」という言葉の「べき」という言葉は、「義務がある」「借金がある」という意味の言葉です。ですからこの「愛し合うべきです」という言葉は、「愛し合う義務がある」「愛し合う借りがある」という意味なのです。

ヨハネは、7 節では「愛し合ひましょう」と呼び掛ける程度であったのに、なぜ 11 節では「愛し合う義務がある」「愛し合う借りがある」と強い口調になったのでしょうか。それは 7 節後半から 10 節に書かれている内容に関係があります。ヨハネは 7 節後半から 10 節にかけて、「神様の愛」について書いています。ヨハネは「神様の愛」について書いている間に、「愛し合ひましょう」なんて生ぬるいことなど言ってられない、むしろ私たちは「愛し合う義務」があるのだ、神様に愛された私たちは、「愛」の借金があるのだ、だから神様に愛された私たちが「愛し合う」のは当然なのだ、そういう思いにさせられたのです。

ではヨハネがここで「愛し合ひましょう」また「愛し合うべきです」と言っている「愛」というのは、いったいどのような「愛」なのでしょう。

ギリシア語には、「愛」を表す言葉が 4 つあります。一つは「ストルゲー」。これは家族同士の家族愛を表す時に使う言葉です。二つ目は「エロース」。これは男女同士の性的な愛を表す時に使う言葉です。そして三つ目は「フィリア」。これは友達同士の友愛を表す時に使う言葉です。そして四つ目は「アガペー」。これは自己犠牲的な愛、無条件の愛を表す時に使う言葉です。この 4 つの「愛」を表す言葉のうち、新約聖書に出てくるのは、「フィリア」と「アガペー」だけです。そしてヨハネがここで「愛し合ひましょう」また「愛し合うべきです」と言っている「愛」というのは、「アガペー」の「愛」です。つまり自己犠牲的な「愛」、無条件の「愛」です。ヨハネはここで、私たちは自己犠牲的な「愛」で、無条件の「愛」で、愛し合うべきだと言っているのです。

2. 神の愛

しかしどうでしょうか。私たち人間の愛の現実には、自己犠牲的な愛や無条件の愛であるよりも、むしろ自己中心的な愛や条件付きの愛であることが多いのではないのでしょうか。確かに自己犠牲的な愛や無条件の愛は、私たちに感動を与えます。それゆえ私たちは、そのような愛を求めます。そしてそのような愛を持ちたいとも思います。そしてそのような愛で互いに愛し合うことができれば、私たちの教会も家庭も社会も、素晴らしいものになると思います。

どうしたら私たちは、自己犠牲的な愛や無条件の愛で愛し合うことができるようになる

のでしょうか。

ヨハネは、そのような自己犠牲的な愛、無条件の愛は、「**神から出ている**」と 7 節で言っています。つまりそのような愛は、私たち人間からは出てこない、神様からしか出てこない、そのような愛は神様から泉のように湧き出ていると言うのです。

また 8 節でこのようにも言っています。「**神は愛だからです**」。神様は愛そのものなのです。ですから人は、神様を知らない限り、そのような自己犠牲的な愛、無条件の愛で愛し合うことはできない、またその神様との関係を回復し、神様との交わりに生きない限り、そのような愛で愛し合うことはできないのです。

では神様の愛を、私たちはどのようにして知ることができるのでしょうか。それは、イエス様によってです。9-10 節を見てみましょう。「**神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちにいのちを得させてくださいました。それによって、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです**」。

神様が、私たちにいのちを与えるために、この世界にイエス様を遣わしてくださった、神様が、私たちと神様の関係を回復し、神様との交わりに生きるために、愛するひとり子イエス様を十字架に付けてくださった、その出来事に神様の愛が表されているのです。

イエス様の十字架は、私たちの罪に対する神様の怒りと呪いを宥めるための犠牲です。私たち人間は、神様に造られました。神様に造られた私たちは、神様に従う義務を負います。しかし、アダムとエバの子孫として生まれた私たちは、神様との関係を失い、神様に従わない罪の性質を持って生まれて来ました。そのため、日に日に年を重ねるごとに、神様の怒りと呪いを積み上げて生きて来たのです。アダムとエバの子孫として生まれた私たちが待ち受けているものは、神様の怒りと呪いであり、神様の裁きと刑罰です。それは、この世でのあらゆる苦しみと悲しみであり、肉体の死であり、永遠の地獄の刑罰です。

しかし神様は、私たちを愛してくださいました。私たちを愛するがゆえに、イエス様をこの世界に遣わし、救い主として私たちを神様の怒りと呪い、裁きと刑罰から救おうとされたのです。神様は、イエス様を十字架に付けました。イエス様は自ら十字架に架かりました。神様の怒りと呪いを宥めるため、私たちの罪を償うため、私たちと神様との関係を回復し、私たちを神様との交わりに生かすためです。そして神様の愛を知り、その愛を受け取り、その愛で互いに愛し合うようになるためです。

3. 互いに愛し合う結果

私たちは、神様の愛を知り、神様の愛を受け取る時、私たちも互いに愛し合う者へと変えられていくのです。神様に愛された者は、神様に対して義務を負うようになります。神様に愛された者は、その愛された愛で人を愛する義務を負うのです。

12 節を見てみましょう。「**いまだかつて神を見た者はいません。私たちが互いに愛し合うなら、**

神は私たちのうちにとどまり、神の愛が私たちのうちに全うされるのです」。 私たちがもし互いに愛し合うなら、神様が私たちと共におられるのです。私たちは神様を見ることはできません。しかし私たちが互いに愛し合うなら、そこに神様が共におられ、人々は神様がここにおられるということが分かるのです。神様は愛のうちに臨在されるのです。

おわりに

このクリスマスに私たちは、まず何よりも、イエス様が生まれたことの背後には、神様の私たちに対する愛があることを覚えたいと思うのです。

神様は私たちに、その愛を受け取ってほしいと願っておられます。神様は、その愛を聞き流すだけでなく、受け取ってほしいと願っておられます。神様の愛の受け取り方は、信仰です。神様の愛を信じることです。イエス様を救い主として信じることです。神様の愛を信仰によって受け取った人だけが、互いに愛し合う人へと変えられるのです。